No.

NGO-JICA 相互研修

住民主体の開発とガバナンス
～住民、行政、NGOの関係の理想と現実～

報告書

2006年度

特定非営利活動法人　国際協力NGOセンター（JANIC）
独立行政法人　国際協力機構　JICA地球ひろば

地球ひ
ＪＲ
08-1

NGO-JICA 相互研修

住民主体の開発とガバナンス
～住民、行政、NGOの関係の理想と現実～

報告書

2006年度

特定非営利活動法人　国際協力NGOセンター（JANIC）
独立行政法人　国際協力機構　JICA地球ひろば

ごあいさつ

NGO-JICA 相互研修は今年で 9 回目を迎えました。早いもので、この研修が始まってもうすぐ 10 年が経とうとしています。この間、私自身も NGO 側から検討委員という立場でこの研修に何度か関わらせて頂きました。そもそも、この研修は NGO と JICA の相互理解を促進するために企画されたものでした。研修発足当初は、NGO と JICA のスタッフがお互いに触れ合う機会はほとんどなく、このような研修を通して初めてお互いのことを知ることが出来たと記憶しております。顔と顔が見える交流の場としてこの研修はとても有益だったのです。

その後、本研修への期待値も年を追う毎に変わってきたのではないかと感じています。昨今は、NGO と JICA が連携してプロジェクトを推進することも珍しくはなくなり、いろいろな機会を通じて、両者が触れ合う場も以前に比べれば格段に増えてきたと思います。昔はお互いに知り合い、交流することが本研修の主目的であり、このような場を求めて JICA、NGO 双方から多くの研修生が参加したのだと思います。しかし、今日このような目的からのみでは、NGO-JICA 相互研修を存続させることは難しくなって来ているように感じます。

このような状況認識のもと、2006 年度の NGO-JICA 相互研修は行われました。今年のテーマは「住民主体の開発とガバナンス」でしたが、特にガバナンスは一見難しく感じられるテーマであったかもしれません。しかし、このような難しいテーマに対してこそ、NGO と JICA のスタッフが、単に交流することを超えて、お互いに知恵を絞り、連携のあり方を探ろうとする意義があるのだと思います。それぞれの強み・弱みをよく理解し、両者の違いを認識した上で個々の強い部分を伸ばし、弱い分部分を補う方法を探ることで、初めてガバナンスのあり方に対して多面的な考え方や議論ができたのではないでしょうか。このようなアプローチは、これからの国際協力におけるアクター間連携を考える上で、とても重要なことだと思います。

最後になりますが、今年の研修を開催するにあたり、半年間に渡り研修内容の議論から当日のファシリテートまでを務めてくださった検討委員の皆様、また、当日の運営や裏方業務、そして、とりまとめ作業に携わってくださった方々に深く感謝を申し上げます。

特定非営利活動法人
国際協力 NGO センター
理事・事務局長　下澤　嶽

報告書の発刊にあたって

NGO-JICA 相互研修は、NGO スタッフと JICA 職員等が対等な対話をとおして相互理解を促進し、新たな協働・連携につなげる機会として継続して開催しており、今回で９回目を数えます。

研修の実施にあたってはNGO、JICA 双方の有識者から構成される検討委員会によって、お互いの知見を取り入れながら研修計画を作成しています。また、研修当日には検討委員全員がファシリテーターとして研修に参画することで、さらなる研修の充実を計っております。また、研修の終了時においては、各委員が研修を振り返った上で評価し、研修内容のさらなる充実と研修内容の掘下げ、検討委員それぞれの意見交換を行っております。これら具体的な作業から NGO、JICA 間のひとつの相互理解の場・連携事業の一例としてとしてこの研修が果たしてきた役割は大きなものとして位置づけられるのではないかと考えております。

今年度の研修は「住民主体の開発とガバナンス～住民、行政、NGO の関係の理想と現実～」をテーマとして考えてみました。NGO、JICA それぞれの参加者が「住民主体の開発とガバナンス」というテーマに則して、それぞれの課題を共有し、実際のプロジェクト事例などに基づき成功のポイント、失敗のリスクを議論し、各参加者が現在携わっている業務やプロジェクトの改善のきっかけを掴むことを目指しました。NGO と関係が深い住民自治のレベルから、JICA のカウンターパートとして位置づけられる行政（地域行政～国家）レベルまでガバナンスにも様々ありますが、各々のプロジェクトの推進は住民の力だけでは､その持続性や波及効果を望むことは困難であり､また、行政だけでも当事者の主体性がなければ成功は難しいものと想定されます。各々を取り巻く環境の相違から問題点を見出し、お互いの知見を生かしてその解決の方向性を学びます。

「ガバナンス」というテーマについては、これまで NGO と JICA の間で協議することも少なかったことから、参加者間での概念の共有が難航したり、未消化に終わった状況も生じました。時間の制約もあり議論が十分な解決得るに至らなかったのは残念でした。しかし、研修参加者は、非常に熱心に議論を続け、国内での事例分析やインドネシアにおける現地調査でのインタビュー等をとおして、実務者として意識すべき点をまとめていきました。

現場実務者は「何をするべきか」いう問題解決のためのポイントが本研修から導き出され、成果が本報告書をとおして示すことが出来れば幸いです。加えて、同様の問題意識を持つ多くの方に共有が図られ、参考となることを願います。

最後になりましたが、海外で現場訪問にご協力いただきましたインドネシア「市民社会の参加によるコミュニティー開発技術協力プロジェクト」の皆さん、また研修当日にご講義・ご案内いただきました関係諸氏、難解なテーマに挑み、入念な事前準備と当日の精力的な活躍を担っていただいたコースリーダー磯田厚子先生および検討委員の方々に深く感謝申し上げます。

独立行政法人　国際協力機構
広尾センター
所長　草野　孝久

目次

ごあいさつ
報告書の発刊にあたって

Ⅰ　研修の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　1　研修の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　2　研修の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　3　主催者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　4　研修期間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　5　研修・宿泊場所・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　6　研修経費・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
　7　参加証明書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
　8　研修実施体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
　9　関係者リスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
　10　参加者リスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

Ⅱ　国内研修・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
　1　国内研修の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
　2　事務所訪問・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
　3　パネルディスカッション・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
　4　事例紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
　5　グループワークおよび全体会Ⅰ・・・・・・・・・・・・・ 20
　6　全体会Ⅱ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
　7　全体会Ⅲ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
　8　国内研修アンケート集計結果・・・・・・・・・・・・・・ 35

Ⅲ　海外研修・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
　1　海外研修概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
　2　研修の成果と総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
　3　訪問プロジェクト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
　4　海外研修報告会発表・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
　5　海外研修を終えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117
　6　参加者アンケート集計結果・・・・・・・・・・・・・・・122

Ⅳ　付録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・131

研修の構成

Ⅰ　研修の構成

研修テーマ：

住民主体の開発とガバナンス　～住民、行政、NGO の関係の理想と現実～

１　研修の目的：

１）国際協力を実施する上でのパートナーとしての NGO と JICA 双方の理解促進と国際協力に関する認識を共有すること。

２）将来の連携に向けた人的ネットワークの形成と情報交換の場を提供すること。

３）上記１）、２）を通じ NGO 及び JICA 双方の若手及び中堅人材の育成に寄与すること。

２　研修の概要：

「参加型であれば住民主体となるのだろうか？」「開発の現場におけるガバナンスはどうすれば良いのだろう？」みなさん日々悩まれていることと思います。

NGO が得意とする住民自治のレベルから、JICA が得意な行政（地域行政～国家）レベルまでガバナンスにも様々あります。しかし、開発プロジェクトは住民だけでは、その持続性や波及効果を望むことは困難であり、行政だけでも当事者の主体性がなければ成功は難しいでしょう。

今年度の相互研修は、NGO－JICA それぞれの参加者が「住民主体の開発とガバナンス」に則し、それぞれの課題を共有し、実際のプロジェクト事例などに基づき成功のポイント、失敗のリスクを議論し、各参加者が現在携わっている業務やプロジェクトの改善のきっかけを掴むことを目指します。

３　主催者：

独立行政法人　国際協力機構（JICA）

特定非営利活動法人国際協力 NGO センター（JANIC）

４　研修期間：

国内　２００６年　９月１４日（木）～１６日（土）　２泊　３日

海外　２００６年１１月１３日（月）～２２日（水）　９泊１０日

５　研修・宿泊場所

国内　地球ひろば（東京都渋谷区広尾）

海外　インドネシア・南スラウェシ州

６　研修経費

研修にかかる経費（教材費、宿泊費等）はすべて JICA が負担します。
研修参加にかかる交通費は、東京近郊以外に居住する方についてのみ、JICA 規程に基づき支給します。

７　参加証明書

主催者から、研修全日程を終了された方に参加証明書を交付します。

８　研修実施体制

１）コースリーダーのもとに NGO 諸団体および国際協力機構双方の代表によって構成される検討委員会を設置し、研修内容、実施運営について協議し、決定します。

２）JICA 地球ひろば企画グループおよび国際協力 NGO センターに事務局をおき、研修を実施します。

９　関係者リスト

氏名	所　属　団　体	肩書	備考
コースリーダー			
イソダ　アツコ 磯田　　厚子	女子栄養大学栄養学部 特定非営利活動法人日本国際ボランティアセンター（JVC）	教授 副代表	国内研修 コースリーダー
タケダ　ノブヒサ 武田　　長久	JICA 国際協力専門員		海外研修 コースリーダー
検討委員			
イイヅカケンイチロウ 飯塚　　健一郎	JICA 中東・欧州部アフガニスタン支援チーム		検討委員
イワマ　ハジメ 岩間　　創	JICA 社会開発部第一グループ社会制度・平和構築チーム		検討委員
オゼキ　ヨウコ 尾関　　葉子	DADA：アフリカと日本の開発のための対話プロジェクト	代表	検討委員
オノ　シュウジ 小野　修司	JICA 地球ひろば企画グループ	グループ長	検討委員
スズキ　マリ 鈴木　　まり	特定非営利活動法人日本国際ボランティアセンター（JVC）		検討委員
タケウチ　ヤスト 竹内　　康人	JICA 地球ひろば企画グループ市民参加チーム	チーム長	検討委員

トガ　タツロウ 戸賀　竜郎	特定非営利活動法人国際協力 NGO センター		検討委員
ナガハタ　マコト 長畑　　誠	いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク（あいあいネット）	代表	検討委員
フルサワ　メイ 古澤　　めい	特定非営利活動法人草の根援助運動	事務局次長	検討委員・ 海外研修同行
ムカイ　イチロウ 向井　　一朗	JICA 農村開発部第一グループ貧困削減・水田地帯第一チーム	チーム長	検討委員

【講師他】			
シモザワ　タケシ 下澤　　獄	特定非営利活動法人国際協力 NGO センター	事務局長	事務所訪問講師
ツツイ　テツオ 筒井　　哲朗	特定非営利活動法人シャプラニール＝市民による海外協力の会	事務局次長	事務所訪問講師
ワタナベ　コウゾウ 渡部　　晃三	人間開発部第三グループ保健行政チーム	チーム長	事務所訪問講師
リ　サンイン 李　祥任	特定非営利活動法人シェア＝国際保健協力市民の会		事例紹介講師
アカマツ　シロウ 赤松　　志朗	JICA 国際協力専門員		事例紹介講師
オノ　ユキオ 小野　行雄	特定非営利活動法人草の根援助運動		パネリスト
クワシマ　キョウコ 桑島　　京子	社会開発協力部第一グループ	グループ長	パネリスト
【その他・事務局】			
ヤスダ　カオリ 安田　　香	地球ひろば業務グループ連携促進チーム		インターン
トミノ　タケシ 富野　　岳士	特定非営利活動法人国際協力 NGO センター		事務局
イナオ　トシタカ 稲生　　俊貴	地球ひろば企画グループ市民参加チーム		事務局

１０　参加者リスト

	【NGO】			
	氏　名	所　属　団　体	所　属　部　署	担 当 業 務
1	ウエダ　タカコ 植田　　貴子	特定非営利活動法人 シャプラニール＝市民による海外協力の会	クラフトリンクグループ	手工芸品販売他
2	ウエタニ　ミユキ 上谷　　美幸	特定非営利活動法人 日本口唇口蓋裂協会	－	ﾓﾝｺﾞﾙ医療支援業務・ ﾍﾞﾄﾅﾑ予防ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ
3	オサカ　ヤスユキ 小坂　　康之	財団法人 国際開発救援財団	海外事業チーム	海外プロジェクト サポート他
4	オバタ　ジュンコ 小幡　　順子	特定非営利活動法人 じゃっど	理事長	代表
5	カワムラ　トモユキ 河村　　智行	特定非営利活動法人 ハート･オブ・ゴールド	経営企画	広報、事業企画、 ファンドレイジング
6	コイズミ　カオリ 小泉　　香織	特定非営利活動法人 シェア＝国際保健協力地球市民の会	東京事務局	東チモール事業
7	サカイ　エリカ 酒井　　絵里　香	特定非営利活動法人 アクセス－共生社会をめざす地球市民の会	マニラ事務局	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ業務・ ﾌｪｱﾄﾚｰﾄﾞ業務
8	サカイ　タモツ 酒井　　保	特定非営利活動法人 日本国際飢餓対策機構	国際協力隊	海外駐在員ﾘｸﾙｰﾄ・ 国内ｲﾍﾞﾝﾄ企画運営
9	シモダ　トモノリ 下田　　寛典	特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター（JVC）	－	緊急支援・ 復興支援事業
10	スギモト　マサツグ 杉本　　正次	特定非営利活動法人 地域国際活動研究センター	企画部	事務局長
11	タケヒサ　ヨシエ 竹久　　佳恵	特定非営利活動法人 AMDA	海外事業本部	東南アジア諸国の 事業運営管理
12	トリカイ　マキコ 鳥飼　　真紀子	財団法人 アジア保健研修財団	－	持続的総合地域 開発・会報編集
13	ヤマダ　チアキ 山田　　千晶	特定非営利活動法人 ADRA Japan	開発事業部	ラオス開発事業

	【JICA】		
	氏　名	所　属　部　署	担 当 業 務
1	アオキ　トモコ 青木　　知子	人間開発部第一グループ（基礎教育）基礎教育第二チーム	教育プロジェクト（中米）
2	イトウ　キミオ 伊藤　　公男	大阪国際センター業務第二チーム	草の根技術協力
3	イトウ　リカ 伊東　　里佳	国際協力人材部人材確保グループ人材確保チーム	専門家人選、調整業務、 派遣手続き・広報
4	さいとう　ダイスケ 齋藤　　大輔	地球環境部第一グループ森林・自然環境保全第一チーム	技術協力プロジェクト、 専門家派遣
5	サイトウ　メグミ 齊藤　　恵	地球ひろば企画グループ企画チーム	展示企画の運営管理･ ｲﾍﾞﾝﾄ企画運営等
6	しんどう　ハルカ 神藤　　はるか	地球ひろば企画グループ市民参加チーム	市民参加協力事業の指針の 作成
7	セオ　タク 瀬尾　逞	農村開発部第一グループ貧困削減・水田地帯第一チーム	貧困対策プロジェクト・ 復興計画
8	タカハシ　ナオフミ 高橋　　直郁	社会開発部第二グループ（都市地域開発・復興支援） 都市地域開発・復興支援第一チーム	会議議事録作成、資料作成、 課題タスク事務
9	ナカムラ　スミコ 中村　　寿美子	青年海外協力隊事務局国内グループ ボランティア参加促進チーム	協力隊事業参加促進･ 現職教員特別参加制度
10	ナムラ　キンヤ 名村　　欣哉	中国国際センター業務第二チーム	草の根技術協力、青年招聘
11	ニシダ　ユウイチ 西田　　有一	社会開発部第二グループ（都市地域開発・復興支援） 都市地域開発・復興支援第一チーム	技術協力プロジェクト、 専門家派遣
12	ミヤケ　サチコ 宮家　　佐知子	国際協力総合研修所調査研究グループ援助手法チーム	調査研究･ﾏﾙﾁﾒﾃﾞｨｱ教材作成
13	ワキタ　チエ 脇田　　智恵	中部国際センター連携促進チーム	草の根技術協力・NGO との連 携事業
14	ワタナベ　ヒデキ 渡辺　　英樹	東京国際センター業務第二グループガバナンスチーム	本邦研修・技術協力プロジェ クト

＊[　　]: 海外研修参加者

国内研修

Ⅱ　国内研修

１　国内研修の概要

１）　研修テーマ

住民主体の開発とガバナンス

～住民、行政、NGO の関係の理想と現実～

２）　研修期間

国内　2006 年　9 月 14 日（木）～16 日（土）　２泊　３日（合宿）

３）　研修参加者

NGO 参加者　１３名

JICA 参加者　１４名

合計　２７名

４）　国内研修日程

9 月 14 日（木）

事務所相互訪問（希望者のみ）

時　間	NGO 参加者	時　間	JICA 参加者
13：30	集合・受付（JICA 本部 11A 会議室）	13:30	集合・受付（JANIC 事務所）
13:45　～ 14:45 15:00　～ 16:00	・JICA の組織と今後の課題 ・プロジェクトについて	13:45～15:00	NGO のプロジェクト運営・支援体制と国際協力活動の現状
16:00　～ 16:30	総括・質疑応答	15:10～16:30	シャプラニール訪問 ① 組織・事業概要 ② 職員の日常業務
16:30～	地球ひろばへ移動		
		16:30～	地球ひろばへ移動

国内研修（全員）

17：30～	地球ひろば　会議室　集合　開講式・事務連絡　夕食
19：00～20：30	パネルディスカッション「住民主体の開発とガバナンス～住民、行政、NGO の関係」 の現状と課題
20：30～21:30	グループ・ワーク１ 「事例分析のための視点の共有」～パネルディスカッションを踏まえて
全　員　宿　泊	

9 月 15 日（金）

09:00～10:00	グループ・ワーク２（グループワーク１のつづき） 「事例分析のための視点の共有」～パネルディスカッションを踏まえて
10:00～12:00	事例紹介 NGO の事例：　シェアタイ　エイズプロジェクト JICA の事例：　インドネシア スラウェシ貧困対策支援村落開発計画
12:00～12:30	グループ・ミーティング
12:30	昼食
13:30～18:00	グループ・ワーク３「事例分析」（15:30～16:00　中間発表）
18:00～19:30	夕食・懇談会
19:30～21:30	グループ・ワーク４「提案・発表準備」
全　員　宿　泊	

9月16日（土）

	発表準備
10:00～12:00	全体会１　「グループ・ワーク発表」
12:00～13:00	昼食
13:00～14:30	全体会２　「アクション・プランに向けた仮題の再整理」 ～ガバナンスのあるべき姿の実現のために、各アクターはどうすべきか、どうしてはいけないのか？～
14:30～16:00	全体会３　「アクション・プラン作成・発表」 14:30～15:15　アクション・プラン作成 15:15～16:00　アクション・プラン発表 16:00～16:30　結果の共有と総括
16:30～17:00	閉講式　アンケート記入・解散

２　事務所訪問

１）　概要

NGO－JICA 双方の相互学習・相互理解を深めるために、それぞれの組織概要や事業の進め方などを知ることを目的として、研修最初のプログラムとして希望者を対象に事務所相互訪問を行った。

NGO 側参加者は、JICA 本部にて、JICA の事業概要・組織・業務フロー、及び、JICA 人間開発部の事業概要・技術協力プロジェクトについて、各々の部署の担当者より説明を受けた。

また、JICA 側参加者は、（特活）国際協力 NGO センター（JANIC）下澤嶽事務局長より日本の NGO の状況について説明を受けた。また、特定非営利活動法人 シャプラニール＝市民による海外協力の会にも訪問、筒井哲郎事務局次長から同 NGO の活動状況について説明を受けた。

２）　NGO 事務所訪問

（１）　JANIC 訪問

①　JANIC 概要説明

JANIC の活動内容の柱は①NGO のキャパシティービルディング、②一般の方々への広報、③提言活動が主体をなしている。そのほか、NGO の窓口的なもろもろの業務についても受け持っている。JANIC はネットワーク NGO であり、主として正会員団体は関東に集中している。

② ODA 連携

提言委員会：NGO 外務省定期協議会、NGO-JICA 協議会に参画。

ネットワーク NGO 全国会議：ネットワーク NGO の課題を共有する会議であり提言内容について話し合われる。昨今は、ODA 資金への期待が増す一方、それを批判するグループも存在。いい意味で協働ができている。

③ その他 NGO ダイレクトリーに載っている団体は３００ほどある。

JANIC では、①自己財源３割以上、②活動歴 2 年以上、③連絡可能な事務局を所有、④民主的な運営ができている、などの審査基準をクリアした団体が正会員団体となれる仕組みをとっている。

NGO 向けアカンタビリティ基準を JANIC が作成したが、必ずしも普及しているとはいえない。

また、会員のサービス、会員資格、NGO の相違などについて活発な質疑応答も行なわれた。

【質疑応答内容】

1）個人会員へのサービスはどのようなものがあるのか？
シナジーという会報誌を送付しているのみ。

2）企業との連携はどのようにしているのか？
２０の企業が会員となっている。その他、勉強会、個別対応などを含めると５０～６０の企業と関係している。CSR に積極的に意見するという段階までは至っていない。

3）多文化共生に関する NGO の加盟の可能性は？
国際交流色が強い団体は加盟できない。

4）団体にとって、JANIC に加盟するメリットは？
何かのキャンペーン、アドボカシーをする際は、JANIC をとおすことが共通認識。（特に広報、渉外の部分）
JANIC をとおして NGO の文化、存在をたくさんの人に知ってもらうことを目指している。
また、団体の規模によっても期待するものは違う。

5）なぜアカンタビリティ基準に抵抗感を示す団体が多いのか？
基準そのものがマニアックすぎるため。また、全会一致が基本のため合意形成が難しい。

6）国際 NGO と日本の NGO の違いは？
国際 NGO の方が組織化されている。高額のお給料をもらえる。

7）日本の NGO の日本らしさのようなものはあるか？
教育、保健など human resource に関わる分野の団体が多い。全体的に小規模で、プロとしての要素が弱く、人も定着していない。
なお、日本の NGO の長所、特徴は、①日本の NGO の方が現場に深く入っていく傾向がある。②相手の文化や立場に対してセンシティブで、彼らからも学ぼうとする姿勢がある、③ODA に近い（日本の ODA を使いたいという声が多くある）といった点が上げられる

8）欧米の方がプロ意識が強いのはなぜ？
NGO はそもそも欧米から生まれた文化であり、我々はそれに改良を加えたり、学びを得たりする傾向がある。

（２）　シャプラニール＝市民による海外協力の会活動内容説明

①　歴史（沿革）

1974 年の前身団体の活動開始から現在に至るまでその活動方法を変えながらバングラデシュを中心に援助を継続、直接指導から相互扶助グループ、ショミティへの支援に移ってきた。1972 年の「バングラデシュ復興農業奉仕団」活動終了後、「HBC（ヘルプ・バングラデシュ・コミティ）」を設立し農村でプロジェクトを実施してきた。1977 年に駐在員が盗賊に襲われ重傷を負う事件が発生。その後の協力、農村部における協力活動は、「ショミティ」という貧しい農民たちが自発的に集まって作る生活向上のための相互扶助グループへの支援が基本となっている。

ショミティ活動の基本は、定期的に集って話し合いを持ち、日常生活上の様々な問題について話し合い、知恵を出し、協力して解決への道を探っている。

ショミティのメンバーは、毎週決まった額を出し合って、ショミティ基金を積み立てている。

ショミティ育成活動は、最初は小さな地域団体への支援から始まりましたが、80 年代末からはより効果的な運営を目指し、シャプラニールが設置する地域活動センターを通して直接行ってた。その後、地元出身のスタッフが活動の管理運営能力を徐々に身につけてきたことから、活動を地域の人々に任せていくことが可能なった。99 年と 2000 年には、地域活動センターの 2 つが現地 NGO として独立した。

②　活動

バングラデシュでの活動のほかネパールにおいては現地 NGO に対する支援により活動、2006 年からはインド西ベンガル州においても活動開始、民族、文化、伝統が近い 3 地域は相互交流も盛んであることからシャプラニール自体がインドで活動を行うことで、これら 3 ヶ国のプロジェクト関係者（と私たち）には、より深い交流、学び合いの機会が保障されることを目指している。

「ショミティ」へは次の支援を基本として行なっている。

（ｉ）ショミティの育成と研修
（ii）成人識字学級
（iii）児童教育（補習学級）
（iv）保健衛生環境の改善
（ｖ）収入向上のための融資

３）　JICA 本部訪問

（１）「JICA：独立行政法人化と統合に向けての動き」

講師：地球ひろば　企画グループ　グループ長　小野　修司

内容：独立行政法人化と JICA

JICA の改革方針

統合について

JICA 組織概要

業務フロー概念

（２）「人間開発と技術協力プロジェクト」

講師：人間開発部保健行政チーム　チーム長　渡部　晃三

内容：人間開発部の組織と役割

保健医療分野の協力概要

技術プロジェクトの実際

NGO 側からは計 6 名が JICA 本部訪問に参加した。参加者は、JICA 本部会議室において、独立法人化された JICA の事業概要について説明を受けた。「JICA：独立行政法人化と統合に向けての動き」では、事業団法と機構法の相違や独立行政法人化された JICA の改革方針についての理解を深めることができた。特に、１）成果重視・効率性、２）透明性・説明責任、３）市民参加の推進、４）平和構築支援・復興支援事業の強化の 4 点について独立法人化後の JICA が力を入れていることを理解した。中でも、市民参加の推進強化を目的に「地球ひろば」の設立が行われたことがわかった。また、組織図や業務フロー概念図の説明を通して、「現場強化」や「効率性・迅速性向上」を組織面、業務手順面からも図ろうとしていることが理解できた。

次に、「人間開発と技術協力プロジェクト」では、JICA 組織における人間開発部の役割や人間開発部の概要についての説明を受けた。その中で、保健医療分野の役割や事業概要、同分野における技術協力プロジェクトの定義や具体的事例などについての説明を受けた。技術協力プロジェクトにおけるプロジェクト・サイクルや実施手順、プロジェクト実施の枠組み、評価手順などに関して理解を深めることができた。

両講義を通じて参加者からは、特に NGO との連携の具体的事例や成功・失敗のポイントなど、本研修の主題でもある NGO と JICA の強み・弱みを踏まえた連携のあり方を探るような質問が出された。

以上

３　パネルディスカッション

１）　テーマ

「住民主体の開発とガバナンス～住民、行政、NGO の関係」の現状と課題

２）　パネルディスカッションの目的

「住民主体の開発」や「ガバナンス」という言葉、どちらもこの業界ではしばしば耳にするが、「それはどういうことか」と問われると、なかなか一言では答えられない人も多いだろう。「住民主体の開発におけるガバナンス」とはいったい何なのか、なぜそういう視点が必要なのか。研修の最初のセッションであるこのパネル討議では、参加者たちが自ら考え、後半の事例分析における視点を導き出す手助けとなることを目的に、NGO と JICA それぞれの実践についてのお話しを聞くことにした。

３）　パネリスト

小野行雄さん（草の根援助運動）
桑島京子さん（JICA 社会開発部第一グループ）
武田長久さん（JICA 国際協力専門員）

司会進行

長畑誠（いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク）

４）　小野行雄さんのお話

草の根援助運動が関わったフィリピン・マニラ湾の漁民による沿岸資源管理プログラムを例に、漁民コミュニティの活動と行政との関係、NGO の役割、中央と地方行政の違い等について、具体的な実例をもとにざっくばらんにお話しいただいた。住民組織の結成と意識向上を経て、漁民自身による資源再生・保護・管理の活動が展開されるに至った経緯、そして NGO が行政と住民組織とを繋ぐ役割を果たしていること、等が説明された。またフィリピンにおいては地元の NGO が行政と良好な関係を築いている例が多いこと、そして何よりも人と人の個人的な結びつきを積み上げていくことが、各ステークホルダーの協力関係を作っていく上で大切だ、ということが強調された。

5）　桑島京子さんのお話

まずはJICAにおける「ガバナンス」の定義（複数のアクターの間で合意形成、権力や資源の分配、意志決定の仕方などを決めるメカニズムやルールの形成・運営）や、「住民主体の開発」についての考え方（住民が主体となって事業を計画し応分の負担をしながら実現し、裨益する）に触れられた後、具体例として、技術協力プロジェクト「インドネシア・スラウェシ貧困対策支援村落開発計画」が紹介された。このプロジェクトについては翌日の事例発表でも取り上げられるので、ここでは詳しく触れないが、住民主体の開発を促進するため、様々な行政機構やNGO、住民組織、大学などが、どのような役割分担のルールや支援のメカニズムを作っていくか、という視点が「住民主体の開発とガバナンス」を考える上で重要との考え方が提示された。

6）　武田長久さんのコメント

以上のお話をうけて、武田専門員からは、次の３つのポイントが提示された。

（1）「住民主体」と言った場合、「どの住民」をさしているのか。誰が参加しているのか。

（2）「誰が主体なのか」。住民が自らイニシアティブをとり、行動を起こしているのか。

（3）「仲介組織」としてのNGOの役割とは何か。行政と住民をつなぎ双方が主体的に行動をおこすためのファシリテーションの重要性。

7）　長畑によるまとめ

住民主体の開発におけるガバナンスとは、「共同」と「協働」という二つの言葉で表されるのではないか。「共同」とは、コミュニティの中で、共通の課題を解決するためにいかにして共同して行動するか、ということ。そのための役割分担やルール作り。「協働」はコミュニティと外部との関係において、地方行政やNGO等の外部者とコミュニティがいかにしてパートナーシップを組んでいけるか、ということ。そのための関係作りのあり方。住民主体の問題解決行動と、行政の側の開発計画や政策とをどう繋ぐか、ということも重要な視点であろう。

４　事例紹介

シェアタイ　エイズプロジェクト概要

タイでは 1984 年の HIV 感染の報告以来、既に 100 万人以上が HIV 感染していると推定されている。また、毎年約 2 万人が新たに感染しており、15 歳から 49 歳の人口の約 2%が感染者とされています。

タイ東北部では都会や漁業地域への出稼ぎ労働者が多く、出稼ぎ先で HIV に感染したのを知らずに地域に戻り、性行為によるパートナーへの感染、さらに母から子への感染のケースが多くなっており、農魚村ではエイズに感染による問題が存在している。近年ではエイズ発症を抑えるための抗 HIV 薬が政府から無料で提供され、感染者の治療に関する環境は変わってきた。しかし、また感染者への差別・偏見、エイズ孤児、家族の問題、経済的な不安定さ、治療の困難さなど課題は山積されている。シェアではエイズ問題の解決を計ることが可能なのは、感染者を含んだ住民自身であると考え、村人たちを主体とした予防教育やキャンペーンなどの活動を行っています。また HIV 感染者がお互いに助け合うことが出来るように感染者によるグループ作りも支援している。

1990 年からタイ東北部においてプライマリー・ヘルスケアのプロジェクトの運営実績をもつシェアタイはまた、下痢予防や栄養改善のプロジェクトに住民参加型アプローチを導入、地域の住民とともに問題解決にむけて学んできた。そのプロジェクトの経験から深刻化してきたエイズ問題に対してもその解決をはかることとした。プロジェクトは①HIV 陽性者グループ活動支援、②農村地域での参加型エイズ啓発活動支援の 2 つの柱から成り立っている。

①HIV 陽性者グループ活動支援

シェアの活動は活動地域の国立病院と協力しながら、陽性者のグループ作りから始まり、グループの自助活動を推進してきた。グループ活動の成熟にしたがってリーダーチームが形成されるようになり、自助活動を率先して行うようになってきた。それらリーダーチームの中には他の陽性者グループの活動強化を目指し支援活動を行っているグループも存在する。また、シェアは自助活動に対して運営・活動支援を行うとともに地域における HIV 予防、啓発活動などを行っている。

②農村地域における参加型エイズ啓発活動支援

農村地域においては村のリーダー、若者グループ、主婦グループ、学生などの地域グループを対象に HIV についての正しい知識と感染予防の情報について提供し、彼らから家族や他の村人に正確に伝えられるよう支援している。また、活動をつうじて村内の HIV 問題解決への住民自身での取り組み、陽性者及びその家族の差別・偏見ない受け入れを支援できる地域の構築を目指している。

５　グループワーク及び全体会Ｉ

１）概要

（１）　概要

ワークショップに先立ち行われた事例報告により、参加者は状況や問題を共有することができ、また現場経験の少ない参加者にとっては具体性を持って議論に臨むことができた。参加者は 8～9 名程度の 4 グループに分かれ、各グループにはそれぞれ 2 名のファシリテーターが入り、報告された事例について住民主体の開発とガバナンスに関して分析し、議論した。

以下、各グループのファシリテーターより内容を報告する。

（２）　グループ分け

グループ	NGO 参加者	JICA 参加者	ファシリテーター
A	鳥飼真紀子 小坂　康之 植田　貴子 小泉　香織	中村寿美子 瀬尾　　逞 伊藤　公男	古澤　めい 竹内　康人
B	杉本　正次 小幡　順子 下田　寛典	名村　欣哉 脇田　智恵 西田　有一 斉藤　　恵	尾関　葉子 飯塚健一郎
C	酒井　　保 上谷　美幸 山田　千晶	青木　知子 宮家佐知子 渡辺　英樹 齋藤　大輔	長畑　　誠 岩間　　創
D	竹久　佳恵 河村　智行 酒井絵里香	伊藤　里佳 神藤はるか 高橋　直郁	鈴木　まり 向井　一郎

2）　Aグループ

古澤めい

（1）　分科会の議論の概要

①　視点の共有

パネルディスカッションを受けて事例分析するにあたって重要と思われる視点をブレインストーミングした。まずガバナンスの定義についての議論が出たが、定義は様々なので、まずはガバナンスをAグループ各人のイメージのままで議論し、議論の過程の中で、ガバナンスの定義を共有することとなった。

また、コミュニティとは？といったパネルを聞いての疑問点がいくつか出された。さらに、NGO や JICA という外部者としてどのようにかかわるかという視点が重要という点も指摘された。

②　分析の概要

ワークショップの詳細は、別頁のプレゼンテーション資料に譲るとして、ここでは、主な議論を紹介したい。

事例紹介の後、Aグループでは、まず、ⅰよいガバナンスのイメージを出し、ⅱそれに至るプロセスを議論した。その過程で、ガバナンスは、住民主体の開発と重なるのではという指摘が出された。

他のグループの議論を見てまわった中間発表の後、住民主体の開発について議論した。参加者にとって、住民主体の開発については、ガバナンスより身近で、具体的に考えやすかったようだ。

ある程度議論がまとまったところで、次に、住民主体の開発のための各アクター（NGO、JICA、行政）の役割について事例をもとに考えていった。最初によいガバナンスのイメージを考えた際には疑問であった、3者の関係について、ここで出された各アクターの役割をもとに考えた。

さらに、住民主体の開発のために必要なものは何かを事例から分析した。教訓を引き出すために、最初に考えたよいガバナンスに至るプロセスに照らし合わせて、事例から成功要因を抽出していった。

分析の過程で、最初には出されなかった視点として、外部条件、対話を促す役割の存在が加えられた。

（2）　所感

参加者全員が積極的に議論に参加し、充実した分科会となった。

Aグループの議論の進め方は、プレゼンテーション資料の最後にもあるように、最初に出したよいガバナンスのイメージを分析によって肉付けしていくという帰納的なもので興味深かった。

ファシリテーターの反省点でもあるが、参加者それぞれの経験が議論の中でもっと出されると、より議論が活発になったのではないだろうか。プレゼンテーション資料には出てこないが、議論の中では、参加者の日々の活動にとって大切なポイントが色々出されていたと思う。それらが、それぞれの活動の中で活かされることを期待している。

3） Ｂグループ

飯塚健一郎

（1） 分科会の議論と概要

① 進め方

Ｂグループでは、集合と同時にホワイトボードに「住民主体の開発とガバナンス」を記し、議論すべき内容の確認を行った。

その上で、自己紹介を行い、この研修で期待すること等全員で共有した。

その後、「ガバナンス」のキーワードを洗い出し、各々のガバナンスのイメージを具体化するとともに、グループ内で共有し、グループで考えるガバナンスを定義することとした。

事例紹介を受け、２つの事例から「ガバナンスの定義」を深めるとともに、その定義をもとに住民主体の開発とそのためのガバナンスのあり方について議論を発展させた。

また、自分たちが開発の主体者であることを意識し、住民主体の開発のために「やるべきこと」、「やってはいけないこと」、NGO、JICA のそれぞれの強みと弱みを分析した。

② 「ガバナンス」の定義

ガバナンスのイメージとして、

・ルール作り
・システムの構築（行政と住民の関係）
・地域社会の存在
・アクター間の調整能力

等があげられた。それらをもとにそれぞれが持つ漠然としたイメージをグループ化していくことにより、自分たちの考えるガバナンスを、

・「自分たちを支え、くらしをよくしていくしくみ」
・「コミュニティ内外の権力者に意思や意見を伝達できる仕組み」
・「複数の人間が集まり、しくみ・きまりごとが存在している姿」

としてまとめた。

③　事例分析

限られた時間の中で、開発とガバナンスの関係の分析は厳しいものであったが、議論を始めた頃に、事例報告者がグループを訪問してくれたことで、参加者の疑問点を早い段階で解決することができた。

JICA 側の事例は政治的な背景や政治力により地域開発を実施したトップダウン型、NGO 側は個人の意識の高まりから地域社会、行政機関の変化を促進したボトムアップ型であったことから、２つの対照的な事例をもとに「住民主体の開発とは」、「行政の役割とは」、「誰がアクターなのか」について深く議論した。

特にそこから「グッドガバナンス」に踏み込んで議論できたことは、JICA、NGO それぞれの立場で住民と行政をつなぎ合わせていく上で非常に重要な視点で共有することができた。

また、２つの事例をもとに、個人の今までの経験も含め、住民主体の開発のために「やるべきこと」、「やってはいけないこと」を分析し、住民主体の開発のためのガバナンスのあり方について深化させるとともに、それぞれが開発のアクターとして、強み、弱みを分析することにより、NGO と JICA の立場、役割について理解を深めることができた。

（２）　所感

「住民主体の開発とガバナンス」という国際協力に携わるものにとって身近でありながら、なかなかその意義が具体的にイメージし難い題材に対して、戸惑いも感じながらも、全員がしっかり議論を行い、整理することができたと考える。

議論を進める上で、ガバナンスという言葉にとらわれ、住民主体の開発への議論の発展に進むまでにかなりの時間を要したが、NGO の視点、JICA の視点を分析し、住民主体の開発というものが、住民だけで実施するものではなく、また行政の強化だけで発展していくものではなく、それぞれの立場でやるべきことをやり、また連携していくことにより、「グッドガバナンス」が生まれ、よりよき地域の発展が期待されることが理解できたのではないかと考える。

３日間で議論するには、大きな内容だっただけに、完全に消化できてはいないかもしれないが、今回の研修により参加者の視野が広がり、住民主体の開発のアクターとして、NGO と JICA が協働し、活躍することを期待したい。

4）　Ｃグループ

岩間　創

（1）　分科会での議論

①　グループ・ワーク１（ブレインストーミング）

初日、パネル・ディスカッションの後、正味一時間弱と時間が限られていたこともあり、各参加者の自己紹介の後、パネル・ディスカッションを踏まえ疑問点や関心事項についてブレインストーミングを行った。この時点では特段出された意見の整理は行わず、翌日以降の議論を前に各人の予行演習的位置づけの時間であった。

②　グループ・ワーク２（視点の共有）

2 日目、前日の議論を踏まえ、こんどは「住民主体の開発」、「ガバナンス」及び「住民主体の開発とガバナンスの関係」についてそれぞれの視点の共有を図った。具体的にはまず各人がポストイットに疑問点、関心事項についてなるべく数多く記入していき、その後グルーピング化していく作業を行った。この一連の進め方及び進行については基本的に参加者の自発的提案及び司会進行により進められていった。

③　グループ・ワーク３（事例紹介の分析）

事例紹介の後となる本セッションでは早速 2 つの事例（NGO、JICA）双方について、「成功要因」と「疑問点」というポイントで各人がポストイットに記入していき、その後、グループ・ワーク２と同様にグルーピング化（及びその過程での議論）を進めていった。疑問点については事例紹介をしていただいた講師の方が見学に訪れていただいた際に、率直に質問をぶつけていた。これにより多くの疑問点が解消され、かつ事例の更なる理解と繋がったと思われる。

④　グループ・ワーク４（提案・発表準備）

グループ・ワーク３で抽出した両事例の成功要因を念頭に置きつつ、「ガバナンス（Good Governance の実現）」、「住民主体の開発」という２つのテーマをまずそれぞれわけて議論を行った。テーマごとに「定義・どうあるべきか」、「成功のポイント」、「アクターの役割」、「やってはいけないこと」という見方に対する参加者なりの整理を進めた。グループを２つに分け、各小グループで１つのテーマについて議論し、ある程度固まった段階で今度は別のチームと共に議論を尽くす形をとった。

さらにこのグループでは最後に「住民主体の開発とガバナンスの関係は？」という点について議論を行い、彼らなりの整理を行った点は特筆に価すると思われる。こうした議論の結果はＣグループが作成したプレゼンテーション資料に非常によくまとまっているのであえてこの場で

説明することは省きたい。

（２）　所感

Ｃグループは初日からすべての参加者が非常に積極的かつ自主的に議論の進め方やその進行を行っており、ファシリテーターからするとなんとも頼もしい（ちょっとさびしいくらい！）グループであった。もう一人のファシリテーターである長畑委員からはポイントを押さえた指摘があり（プレゼンテーションはなるべくわかりやすくといったようなアドバイスなど）、個人的には色々勉強となった３日間であった。それぞれのグループワークではポストイットを如何なく活用し、しっかりと議論を形に落としていった点がその後の円滑な議論の進行に役立っていた。このように述べると機械的・事務的に作業が進んでいったとの感をもたれるかもしれないが、実際には参加者自らの努力と創意工夫でメリハリのある議事進行・議論が進められていたと感じている。

４）　Ｄグループ

向井一朗

（１）分科会の議論の概要

①　進め方

事例紹介をふりかえりながら、「住民主体の開発」について、参加者間で深め、共有した。その後、われわれ外部者の視点から、「住民主体の開発」を進めるためのキーとなると思われる、ポイントをいくつか抽出した。

次に、そのポイントを検討の視点として、事例に立ち戻り、どのように「住民主体の参加」を協力プロジェクトの中で実現できるのか、その際にわれわれは外部者としてどのように、「住民」をはじめとする現地の関係者に関わっていけばよいのかについて分析し、とりまとめた。

②　「住民主体の開発」とガバナンス、とは

「住民主体の開発」とは、住民のニーズに基づき、地域社会の様々なリソースをうまく配分動員しながら進める開発。また、「住民主体の開発のガバナンス」は、そのために、住民とそれを支援する関連行政がうまく意思決定できる状態と、その状態を実現できる体制が構築されること。との方向で議論がまとまった。

議論の過程で、「住民」とは誰をさすのかについて、「行政」の職員も突き詰めれば、その土地の「住民」ではないかとの議論があったが、そ

の視点が、地域の住民が、非常に多様であり、外部からアプローチする際には、エントリーポイントを慎重に検討することも重要である、との気付きへとつながった。

③　事例分析の視点

「住民主体の開発」を分析する中から出た様々な視点のうち、以下の３点を分析の視点として抽出し、事例に立ち返り、分析を行なった。

・多様な現地のアクターの中で、「住民主体の開発」を実現するための働きかけのエントリー・ポイントはどこに置くべきか、
・その地域の「住民」と「行政」や他のアクターの関係はどのようになっているのか、
・どのようにすれば、「住民主体の開発」が自立的に持続するのか

④　外部者としてのかかわり方

最初に、どのような条件が整っていれば、成功しやすい「住民主体の開発」の協力を行なうことができるのかについて検討した。

まず、地域社会の受入基盤が整っていることが重要であると考えられた。具体的には、コミュニティに協働のための機能がある程度備わっていることや、地方分権化がある程度進展していることなどが挙げられた。その他、プロジェクトを受け入れるコミュニティが、厳しい貧困状態にはなく、コミュニティの活動がある程度行なえる環境にあることも重要であると提言された。一方、現地に、ファシリテータとしてコミュニティに関わっていける人材がいることも成功の鍵として重要であることも指摘された。

また、プロジェクトを具体的に計画する段階では、事前の地元関係者との信頼関係の構築やビジョンの共有、プロジェクト終了後の退出戦略を予め立てておくことも重要であるとの認識に達した。また、事例の分析から、プロジェクトの実施中に地元の各アクター間の関係性が変化しうることにも注目し、この点にも充分な注意を払いながら、プロジェクトを進める必要があるとの教訓を抽出することができた。

（２）　所感

「住民主体の開発」やガバナンスは、最近特に頻繁に使われる用語ではあるが、実際の現場で、それをどのように推進するのか、ということをきちんとイメージし、関係者と意識共有することが、いかに難しいことであるのか、考えさせられた。今回の研修では、すばらしい事例をつうじて、ある程度意識共有に成功したのではないかと考えるが、これからも現場で、「住民」とは何か、「住民主体」とは何か、そのためのガバ

ナンスとは何か、開発とは...。よく考えてきたいものである。

この分科会では、様々な経験を持つ方が集まり、多様な視点から議論を深めることができたが、はじめに行なった「住民主体の開発」とガバナンス、の概念整理に手間取ったしまった。後半の議論をさらに深めることができれば、より良い分析ができたのではないかと思う。これからも各自が自分の現場で、今夏の研修の成果を深めていっていただければと思う。

６　全体会Ⅱ

進行役：磯田厚子

１）　目的

このセッションは、国内研修最後のセッションとして、国内研修で学んだこと、気付いたこと、考えたこと、議論したことをふりかえり、研修の成果を踏まえつつ、日常を離れた研修という場から日常の世界への橋渡しを行い、研修の成果を持続的に活用できるきっかけを提供することを目的としている。

また、同時に、それぞれが自分自身のふりかえり、気付き、今後に実現したいことを書き出し、シェアすることにより、研修の成果を自分なりに整理し、研修終了後にどのような具体的アクションをとるのかについても検討する。

２）　セッションの流れ

全体を分科会のバランスに配慮しつつ４グループに分け、それぞれのグループで、以下の３段階の個人作業及びグループ内シェアを行った。

（１）「住民主体の開発とガバナンス」の概念で自分が大事にしたい視点と、なぜその視点を大事にしたいと考えるのかを個人であげ、グループ内でシェアする。

（２）「住民主体の開発とガバナンス」の視点で、自分が特に大事にしたいと思うものをあげ、その視点を自分の働き場である組織で活かすには、どのような工夫ができるのか検討し、グループ内でシェアする。

（３）「住民主体の開発とガバナンス」の視点を取り入れて、自分または自分の所属する組織で、実現したいことを表明し、それを実現するためにとるべきアクションと、近い将来になっていたい姿について考え、それをグループ内でシェアする。

３）　セッションをふりかえって

このセッションでは、ワークシートの作成とシェアを通じ、自分なりの研修のふりかえりとまとめを行うとともに、そこから今後の自分の取るべきアクションを表明し、参加者同士でシェアすることで、研修を単なる学びの場に終わらせることなく、研修から今後の具体的アクションへとのきっかけ作りとなったのではと考える。

7　全体会Ⅲ

進行役：向井一朗

1）　目的

このセッションは、国内研修最後のセッションとして、国内研修で学んだこと、気付いたこと、考えたこと、議論したことをふりかえり、研修の成果を踏まえつつ、日常を離れた「研修」という場から、「それぞれの働き」の場への橋渡しを行い、各参加者が、今後の日常業務への取り組みの中で、今回研修の成果を継続して反芻し、持続的に活用する「きっかけ」の提供を目的としている。

また、同時に、それぞれが自分自身のふりかえり、気付き、今後に実現したいことを書き出し、シェアすることにより、研修の成果を自分なりに整理し、研修終了後にどのような具体的アクションをとるのかについても検討した。

2）　セッションの流れ

全体を分科会のバランスに配慮しつつ、４～５名のグループに分け、それぞれのグループで、以下の３段階の個人作業及びグループ内シェアを行った。

（1）まずは、研修を通じて気づいたこと、学んだことをふりかえった。

①「住民主体の開発」がどうあるべきかについて、自分が大事にしたい３つのポイントと、なぜそのポイントを大事にしたいと考えるのか理由をあげる。

②「住民主体の開発」やそのための「ガバナンス」を実現するために、外部者であるわたしたちがやるべきこと、またはやってはいけないことのうち、「私」がぜひ気をつけたいポイント３点。

（2）次に、研修で得たものをそれぞれの「働きの場」で、どのように実現できるか、またそのための課題は何かを検討し、「研修の場」から現実の「働きの場」に、一歩戻った。

研修中、発表された事例をもとにしたグループディスカッションでは、自分の働きの場である「組織」の限界などの足枷から解かれて、「理想とする活動」を話し合った。しかし、私たち自身の、実際の日々の活動はなかなか理想どおりに行かないことが、多々ある。

この段階の作業では、「住民主体の開発」やそのための「ガバナンス」を実現するための活動を自分の所属する組織で行うためには、どのよ

うな点をクリアしなければならないのか。たくさんの課題がある中から、各々が特に重要と思う３つの課題に絞って検討することとした。

参加者の中で、自分の組織が、「住民主体の開発」やそのための「ガバナンス」に関連するプロジェクトを直接に取り扱わない場合には、この研修で知り合った、他の人の組織ではどうだろうか、または自分の知っている組織ではどうだろうか、想像して検討した。

（３）最後に、この研修での学びが、単に日常業務の「形」に反映されるだけでなく、これからの自分自身の国際協力へのかかわり、さらには自分自身の考え方そのものに、変化をもたらすものであって欲しいとの思いから、そのきっかけの一つとして、この研修を受けての、「自分のやりたい、実現したい」ことを考えた。

具体的には、研修を離れて、1ヶ月以内に自分が取り組むこと、半年以内に自分ができるようになること、１年以内に自分がやること、５年以内に自分のなっていたい姿を描き、そのために必要なアクションを考えた。

３）セッションⅢをふりかえって

日常業務を離れた、普段の自分の職場外からの参加者との「研修」では、とかく理想論に終始することが少なくない。また、それゆえに、日常の「働きの場」に戻った際に、研修での理想論と現実のギャップに、やがて、研修での気づきや学びは、得てして、単なる「楽しかった想い出」になってしまいがちでもある。

貴重な時間を使い、素晴らしい参加者たちと過ごした研修を単なる「想い出」に終わらせず、少しでも日常の「働きの場」で活かしていく、また、さらには目の前のプロジェクトの「形を整える」だけでなく、研修成果を自分自身の考え方としてしっかり身につけることで、研修の成果も十分に活用されることになる。

このセッションでは、そのような研修の場から働きの場に立ち返る橋つなぎの場として設定されており、セッションの流れを追って、(1)研修のふりかえり→(2)「働きの場」での活用と課題→(3)研修成果の自分自身の中での活用の、３段階について考えることで、研修を単なる学びの場に終わらせることなく、研修から今後の具体的アクションへとのきっかけ作りとなったのではと考える。

また、セッションを通じて、個人作業で作成したワークシートの作成をグループ内でシェアすることでも、それぞれの気付きと学びを深めることができた。

自分の気付き・学びをふりかえり、発表することで、自分の学びがさらに深まるとともに、グループ内のシェアを通じて、お互いの気づきを学びあい、コメントを述べあうことで、新たな気付きと、さらなる学び、行動へのきっかけをつかむことができたのではないかと考える。

それぞれの参加者には、これからも機会があれば、各自の作成したワークシートを眺め、研修での学び、気付きを思い出して、よりよい活動へとつなげていっていただければと期待します。

名前：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

2006 年　NGO－JICA 相互研修　全体会３ワークシート

16.09.2006

＊　全体会３では、この３日間の相互研修をふりかえり、この研修で得たものをこれから私たち自身の活動に、どう活かしていくのか、みんなで一緒に考えましょう。
以下のワークシートは、お互いにシェアすることを前提に記入してください。

１．「住民主体の開発」がどうあるべきかについて、「わたし」が大事にしたいポイントを最大３つまであげましょう。また、なぜ、わたしがその３つのポイントを大事にしたいと思うのか、その理由をキーワードでよいですので、書いてください。

１）
（理由）

２）
（理由）

３）
（理由）

２．「住民主体の開発」やそのための「ガバナンス」を実現するために、外部者であるわたしたちがやるべきこと、またはやってはいけないことのうち、「私」がぜひ気をつけたいポイントを最大３つまであげましょう。

１）

２）

３）

名前：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

２．発表された事例をもとに、グループでディスカッションをしました。

そこでは、日ごろの「組織」の限界などの足枷から解かれて、私たちの理想とする活動を話し合ったと思います。しかし、私たち自身の日々の活動は、なかなか理想どおりに行かないことも、多々あります。

「住民主体の開発」やそのための「ガバナンス」を実現するための活動を自分の所属する組織で行うためには、どのような点をクリアしなければならないでしょうか。

たくさんの課題があるかもしれませんが、その中から、特に重要と思われる３つの課題に絞って検討してみましょう。

もし、自分の組織が、「住民主体の開発」やそのための「ガバナンス」に関連するプロジェクトを直接に取り扱わない場合には、この研修で知り合った、他の人の組織ではどうだろうか、または自分の知っている組織ではどうだろうか、想像して書いて見ましょう。

１）クリアすべき点：

クリアするためにどのようなアクションが取れそうですか？

２）クリアすべき点：

クリアするためにどのようなアクションが取れそうですか？

３）クリアすべき点：

クリアするためにどのようなアクションが取れそうですか？

名前：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

３．最後に、この研修の結果を受けて、「わたしのやりたいこと」について
どうすれば、より実現に近づくのか考えて見ましょう。
これから、あなたのやりたいことを実現していく上で、必要なアクション
は何でしょうか。　下の表にしたがって、記入していってください。

わたしがやりたいことは、

「

」です。

そのためにわたしは、この研修が終わって、
１ヶ月以内に、こんなことに取り組みます。

「

」

半年以内に、こんなことをできるようにします

「

」

１年以内には、こんなことをやります。

「

」

そして、５年以内には、こうなっています。

「

」

（以上）

８　国内研修アンケート集計結果

今回の研修は「住民主体の開発」と「ガバナンス」という、本質的に切っても切れない深い関係にある課題でありながら、それぞれについての根本的な理解がそれほど容易でない、という二つのテーマを相手にしなくてはならなかった。そのため、事例研究・分科会での討議の中で、「住民主体とは何か」「ガバナンスとは何か」について、参加者の間での共通理解を進めるための話し合いに多くの時間が割かれたようだ。最終的に「住民主体の開発」と「ガバナンス」との関係まで討議を煮詰める時間が足りなかったグループもあるようだが、それでも「住民主体の開発」や「ガバナンス」について、参加者がそれぞれの経験や立場をもとに自由に議論をしたことで、理解がかなり深まったように思える。

一方、JICA と NGO 双方の違いや強み・弱みについての議論は、今回のテーマではなかなか浮き彫りになりにくかった側面がある。住民主体の開発とガバナンスという切り口は、そうした課題に対する「外部者の役割」についての考察を与えてくれたが、JICA と NGO はどう違うのか、何をどうしていけばいいのか、についての具体的な話にはまだまだ至らなかったようだ。これについては、現場で行政と NGO との関わり方の違いを実際に視察できる、海外研修の成果を待つべきかもしれない。

最後に、この研修を経て、具体的にそれぞれの活動・仕事の場で何をどう活かしていくのか、という点について。住民主体の開発を促進する上での自分たちの留意点や、「ガバナンス」という視点から導き出される多種多様な Stakeholders へのアプローチなど、実際の現場に活かされる学びは少なくなかったと思う。ただ、「住民主体」にしても「ガバナンス」にしても、それを現場に落としていくためには、それなりの技術が必要となってくる。この研修ではまだ「入り口」を通過したに過ぎない。参加者たちの今後の研鑽を期待したい。

国内研修 終了時アンケートまとめ

計：28 名

1．研修を通じて、疑問点、不明な点は解消しましたか。またどのようなことを学べましたか。

（1）「住民主体の開発」と「ガバナンス」の捉え方。NGO、JICA の取り組みについて

●「住民主体の開発」と「ガバナンス」の捉え方について

・漠然としか捉えていなかった／全く知らなかったが具体的なイメージを得られた[21]

…「ガバナンス」について多くの収穫[10]：各アクターの関係性が重要[3]、「ガバナンス」＝統治だけではなく仕組み[2]、アクター間でのビジョン共有とそこに至る過程[2]、「ガバナンス」を理解することの難しさ[2]

…両者の関連性[7]：「ガバナンス」は「住民主体の開発」になくてはならない要素、表裏一体ガバナンスの中に「住民主体の開発」が含まれているのでは

…事例紹介が効果的であった[5]：住民・行政・NGO・JICA の関係性を示したイメージ図が理解に役立った、アジア以外での事例も知りたかった

…体系だって整理されているものではなく、進化し続けるもの

・さまざまな角度で「住民主体の開発」について考えられた[3]

・今はまだ自分で消化し切れていないが、今後自分自身の考えとして構築していきたい

・自分の団体は「住民主体」には力を入れてきたがその周りを見ていく必要があるという気づき

・各現場での「住民主体の開発」について参加者の考えの交流があるとよかった

・理解と満足度が 60 点くらい。80 点くらいに感じられるとよかった

・狭義の「ガバナンス」と広義の「ガバナンス」を区別する必要性を感じた

●NGO、JICA の取り組みについて

・NGO と JICA がもつそれぞれの得意分野と共通点が分かった[4]

・JICA と NGO の連携は契約だけでない

・NGO と JICA 双方の立場の違いが際立つような議論もしたい。

・NGO と JICA は外部者であるという本質の確認。

・NGO の取り組みとスタンス

・NGO が抱える課題や開発に対する視点。

・自分の NGO サイズを越えた広い視野を持つことができた。

・自分の所属する組織について客観的に見ることができた。

●その他

・二つの事例をもう少しじっくり検討したかった。

（2）「住民主体の開発」と「ガバナンス」の実践に向けたご自身のアクションプランについて

・学んだことを業務に活かす[20]
具体的には…円滑なコミュニケーションの必要性、資源の適切な活用、気づきを大切に、NGO とのより効果的な案件形成、外部者として住民の声をプロジェクトに反映する、課題の発見、アクターの役割、当事者意識の醸成、住民の実態とニーズの掘り起こし、撤退計画、ときには住民のペースで動く必要性、住民自身が問題に気づきビジョンを描ける機会提供、分かったつもりにならず住民から学ぶ姿勢、ターゲットだけではなく関係性へ着目、時流や地域に応じたプロジェクト形成
・学んだことを自身の今後に活かす[4]
具体的には…自分の所属するコミュニティで自身が住民として主体的な開発を実行する、現場の経験やコミュニケーション能力が自分には足りないことの気づき
・自身のアクションプランに落として考えるのが難しかった[4]
具体的には…概念やテーマが大きい、現在の仕事に直接かかわってはいないテーマ
・養えた視点を海外研修で発揮する。
・学んだことを所属部署で共有する。
・ファシリテーターがうまくリードしてくれたために、この研修を自分自身に落とし込む作業ができた。

2．研修全体で得た成果はどの程度と感じますか。 （１０点満点中　７．５　点）

3．研修中、特に印象に残った点や良かったプログラムについてご記入ください。

・アイスブレークは、全員と知り合えるように長く取ってほしい。
・「ガバナンス」というテーマ設定[2]→これまで深く考えたことがないものだった。
・JICA、NGO 各事例の紹介[7]
具体的には…赤松氏の図を用いた説明がよかった、テーマ理解に役立った
・グループワーク[12]
具体的には…十分な時間配分[2]、他グループの見学ができたことでより多くの人の意見が聞けたこと[2]、事例紹介をふまえての分析[2]、メンバーに恵まれた[2]、グループ内で交流できたこと、限られた時間ではあったが制約の中で成果を出すというプロセス、NGO と JICA それぞれの強みや弱みを話し合えた、人数が適度だった、発表のためのまとめ作業、議論し尽くせたという感覚が得られなかったのは残念
・全体会すべて：グループワークの結果を全体で体感できた。
・全体会 2[3]：いろいろな工夫が見られた、消化不良である
・グループワーク発表：内容や発表方法の違いが各々を補完していた。
・グループワーク⇒全体会⇒個人の発表、という流れ。
・アクションプラン[4]
具体的には…段取りのよさ[3]、3 人という小グループでの意見交換、自分の身近なところにひきつけて考えられた

・ほかの NGO や JICA の方と話すことで視野を広げられた。
・体調を崩してしまったので全日程参加できなかったのが残念。

・ファシリテーターがいたことで、到達点を分かりやすく示してもらえた。
・ミーティングの進行について学ぶことができた。
・
・カフェフロンティアが雰囲気と味ともによかった。
・宿泊施設の洗面所に固形石鹸がほしい。

4．研修の準備や進行について気づいた点、今後の改善や要望事項があればご記入ください。

・配布資料など準備は充分であった[4]
・グループワークで議論する方向性やゴールが予め設定されていなかったため、議論が不十分なものに終わった[4]
具体的には…概念や理念の共有、議論の方向性の決定に時間がかかった。
・時間が足りなかった[4]
具体的には…違うグループの人との交流[2]、NGO と JICA の関係についてまとめる時間[2]、自分の事業について参加者の方からのアドバイスをもらえる機会、地球ひろばの案内
・スケジュールが細かい。
・移動時間や進行の遅れによって議論の時間が十分に取れなかったため、遅れが生じることを見こしたスケジュール設定を求める。
・一日の研修時間が長い。
・各グループワークにてファシリテーターの関わり方に差があった[3]
・懇親会を初日に行った方がより早く皆が打ち解けることができたと思う[2]
・全体会 2 についての改善案[6]
…全体会 1 の成果を消化するためとコミュニケーション（メンバーが変わるため）に時間がかかる、振り返りの時間は必要だと思うが体力的にも厳しかった、グループ変更はよかったが、もう少し時間が長いほうがよかった、テーマは少しひねったものがよい
・NGO の事例紹介について[2]
…テーマと整合していない、プロジェクト期間など基本的な情報が不足していた。
・事例分析の前のグループワークは迷走した。

・事前資料などはあと一週間早く送付してほしい。
・国内研修のみの参加であり、研修の目的を途中で見失ってしまった。
・深夜までの作業は負担ではないか。
・名簿は顔写真付にしたほうが名前と顔を覚えやすい。
・二人部屋もよいのだが、部屋に戻るのが夜遅くなった場合、同室の人に気を使う。
・研修目的をリマインドする機会がほしい。
・グループワークの成果発表後に、各グループの共通点と相違点を共有する時間があってもよいのではないか。
・「ガバナンス」や「住民主体」など複雑な概念を消化するには十分な時間が必要なため、より

スペシフィックな問題設定でもよいのではないか。
・スケジュールが細かい。
・移動時間や進行の遅れによって議論の時間が十分に取れなかったため、遅れが生じることを見こしたスケジュール設定を求める。
・一日の研修時間が長い。
・グループワークはファシリテーターなしでも進められたかもしれない。

5．この研修は一人一人の参加で成り立っています。あなたの自身の「参加度」はいかがでしたか？

（ とても満足[6] ／ 満足[１６] ／ やや不満[5] ／ とても不満[0] ）

＜理由＞

●とても満足

- きちんと議論に参加できた[3]
- グループワークの人数が適切だった
- 自分の意見にレスポンスがきちんと返ってきた、
- 面白いと思えるテーマだった
- 異なる立場の人たちとの意見交換ができた
- 「ガバナンス」への理解が深まった

●満足

- 異なる立場の人たちとの意見交換ができた[6]
- テーマについてじっくり議論できた[3]
- グループワークの人数が適度で発言しやすかった[4]
- ファシリテーターに恵まれた
- 自分の経験に根ざして発言できた
- 具体的事例の分析は足りなかった
- 気を遣いすぎて発言を遠慮してしまう場面もあった。

●やや不満

- 自分の知識が足りなかった[2]
- 知りたかったことと研修の目的がずれていた
- 十分に発言できなかった
- 「はっとするような出会い」や「よい意味でのおどろき」が少なかった
- 討論しつくせていない

6．研修全体の満足度はどの程度と感じていますか。 （１０点満点中 8 点）

7．NGO-JICA 相互研修につきまして、感想、ご意見、ご提案等がございましたらご記入ください。

・短期間で有意義な成果（知識、出会い、モチベーション、意見交換）が得られた[12]。
・ぜひ今後とも継続してほしい[4]。
・内容はよいがスケジュールがタイト[3]。
・所属団体内部ではできない議論ができた。
・参加者以外の人（検討委員など）が多いのは少々プレッシャーになる
・研修が午前中に始まるとより満足できる初日になった。
・テーマは検討の余地がある。
・企業の方（コンサルタント、建築業者、研修の受け入れ先など）の視点や参加があるとよい。
・日本にいる NGO スタッフはフィールドと直接かかわる機会がないことを考慮した研修を設定してほしい。
・地方の方を巻き込み、地方展開を後押ししていっていただきたい。
・国内研修のみの参加は不完全燃焼であった。海外研修にいってこそ意味があるのでは。
・インターネットの接続状況をもう少し整えてもらいたい。
・小・中規模の NGO にも声をかける必要がある。
・研修が午前中に始まると、より満足した初日になったと思う。
・懇親会を初日に行った方がよい。
・あと一日長くてもよいのではないか。
・開催日を金～日曜にしてもらいたい。
・インターネットの接続状況をもう少し整えてもらいたい。

8．本研修はお知り合いの関係者の方々にお勧め頂けるものでしたか？（はい[24]／いいえ[0]／無記入[4]）

[海外研修参加者の方]
9．海外研修に期待することがあればご記入ください。どのようなことでも結構です。

・自分が何を知りたいのか、得たいのかを明確にしてのぞみたい。
・参加者の方からさまざまな刺激を受けながら成長できると思う。
・具体例を見ることで自分の考えを確立したい。
・できるだけ多くの事前資料を早めにほしい[3]。
・できるだけ現地の人とコミュニケーションが取れるようにしたい[2]。
・トラブルがないようにしていただきたい。
・海外研修は国内研修のできるだけすぐ後に実施していただきたい。
・余裕を持ったスケジュール設定を求める[2]。
・なるべく全員と深く話ができるようなグループ分けを求める。
・国内研修のように、深い議論と新しい視点、気づきを得たい。
・確実に参加したいので、いつまでに参加意思の最終確認ができたらよいのか教えていただきたい。
・日程を早めに教えていただきたい。
・「住民主体の開発」に関わる人々の生の声をできるだけ多く聞きたい[3]
　→特に、行政と住民を結びつけるファシリテーター、プロジェクトに関わった人、住民の声
　→特に、現状と当時の関係について聞きたいという意見あり。

＊＊＊ご協力ありがとうございました。このアンケートは取りまとめの上、報告書等に記載いたしますのでご了承下さい。＊＊＊

2006年度 NGO-JICA相互研修
国内研修

NGO事務所訪問アンケート

計９名

1　事務所相互訪問（国際協力NGOセンター及びシャプラニール＝市民による海外協力の会）は期待していた内容でしたか？

はい[9]　／　いいえ[0]

2　内容の構成について、良かった点・改善した方がよいと感じた点をお書きください。

＜良かった点＞

・質問の時間が十分にあり、回答も具体例とともに適切なものだった[5]
・NGOの活動を長年実践してきた方々から話を聞けた[3]
・二つの異なるタイプのNGOを訪問できた[2]
・とても丁寧に話をしていただけた

＜改善点＞

・担当レベルの職員の方から話を聞けなかった
・導入としては良かったが、今回の研修テーマとの関係が必ずしも明らかでなかった

3　訪問の手順について、良かった点・改善した方がよいと感じた点をお書きください。

＜良かった点＞

・二つの異なるタイプのNGOを訪問できた
・NGOの全体像の把握した後に一つのNGOを訪問したので、参加者も良い質問ができていた
・実際の仕事場を見ることができた
・移動時間は短く、訪問時間は長く設定されていた

＜改善点＞

・大荷物を持っての訪問は大変なので、先にチェックインをしたかった[2]。
・代表者だけでなくメンバーの方と自由に話す機会がほしかった
・名札を人数分持ってきていただきたい
・訪問の終了時間はきちんと守ったほうがよい
・より大規模・小規模のNGO事務所を訪問する機会がほしい
・していただきたいことについて、JICAからお願いしておくとよいのでは

4　その他お感じになったこと、ご要望、ご提案があればお書きください。

・事務所訪問参加者間で、訪問の感想などを交換、共有する場があればよかった
・だいぶ時間がおしたので、もう少し余裕を持ったほうがよい

＊＊＊ご協力ありがとうございました。このアンケートは取りまとめの上、報告書等に記載いたしますのでご了承下さい。＊＊＊

2006年度 NGO-JICA相互研修
国内研修

JICA本部訪問アンケート

計7名

1　事務所相互訪問（JICA本部）は期待していた内容でしたか？

はい[6]　／　いいえ[1]

2　内容の構成について、良かった点・改善した方がよいと感じた点をお書きください。

＜良かった点＞

・JICAの組織や変化について理解することができた[5]

＜改善点＞

・オフィスの中や職員が勤務している様子を見たかった[2]
・プロジェクトについての説明では、事例を紹介してもらえると理解しやすかった[2]
・プロジェクト形成についてもっと話を聞きたかった
・事前資料＋当日のレクチャー＋質疑応答、という構成にしてはいかがか
・ICAとNGOが共同で行っているプロジェクトの事例などを紹介していただきたかった

3　訪問の手順について、良かった点・改善した方がよいと感じた点をお書きください。

＜良かった点＞

・テーマの異なるプレゼンテーションが二通り用意されていたこと

＜改善点＞

・パンフレットやメディアでは知ることのできない情報を提供していただきたい

4　その他お感じになったこと、ご要望、ご提案があればお書きください。

・NGOとJICAの両方の事務所を訪問すると勘違いしていたので、募集の際にもう少し分かりやすく記載してあるとよかった。
・JICAの主要事業に「市民参加協力事業」は含まれていなかったので、まだ重視されていないだろうかと素朴な疑問が生まれた

＊＊＊ご協力ありがとうございました。このアンケートは取りまとめの上、報告書等に記載いたしますのでご了承下さい。＊＊＊